

学習障害等のある児童生徒への支援の充実にに関する研究

ー アセスメント方法、指導方法及び教材教具の在り方について ー

主 幹・指導主事 小田切一博
主 幹・指導主事 清水 龍大
副主幹・指導主事 中野 恵子
副主幹・指導主事 芦沢 令子

キーワード 学習障害 アセスメント方法 学習障害の指導方法 学習障害の教材教具

I 主題設定の理由

通常の学級では、学習に困難さを抱える児童生徒たちを「学習に困難がある」「つまずきがある」「読み書きが苦手である」など学習障害と大まかに捉える傾向がみられる。そのため、困難さの要因や背景等に対する具体的な指導や適切な支援につながらず、指導や支援に苦慮している状況がある。

平成28年度～30年度の研究「学校における『合理的配慮の提供』の充実にに関する研究」では、学習障害等の児童生徒の発達特性を踏まえた学習支援について研究を行った。その中で、以下のような課題が挙げられた。

- ・児童生徒の学習面での困難さの背景を適切に実態把握するための手法の検討。
- ・障害特性を理解し、適切な対応ができる指導方法及び教材教具の在り方。
- ・学習障害等に対する自立活動の指導を担当する通級指導教室担当者の資質向上。

これらのことから、学習障害等に対する自立活動の指導を担当する通級指導教室担当者が、早期に児童生徒の困難な状況を把握し、その特性に応じた効果的な指導方法を確立し、専門性及び指導力の向上を図ることが必要であると考え本主題を設定した。

II 研究の目的

本研究の目的は、学習障害等のある児童生徒に対して適切なアセスメントを行い、障害の特性に応じた指導方法及び教材教具の在り方を検討することである。併せて、児童生徒の自立活動を担当する通級指導教室担当者の専門性及び指導力の向

上を図ることである。

III 研究の方法

本研究は令和元年度からの2年計画で進めてきた。2年間を通して、詳細に困難な状況を把握できるアセスメントに関する文献研究及び理論研究と、日下部小学校にあるサポートルームくさかべに研究の協力を依頼して、通級指導教室においての児童の実態把握や指導方法、教材教具の在り方について検討する事例研究を行った。

1年次（令和元年度）

学習障害等のある通級児童の学習場面での困難さを把握するためのチェックリストについて文献研究及び理論研究を行い、実際に学級担任や通級指導教室担当者が活用した。チェックリストを活用することにより、以下のような成果が得られた。

- ・児童の学習の困難さを多角的に捉えることができた。
- ・児童の学習の困難さを明確にすることができ、学級担任と通級指導教室担当者が連携した支援を検討することにつながった。
- ・通級指導教室担当者が新たな課題を把握し、指導目標や指導内容を検討することにつながった。

2年次（令和2年度）

以下の方法により、学習障害に係る理論研究と事例研究を深めた。

理論研究：文献研究、アセスメントツールの検討及び活用の研究、学習の困難さを改善するため困難さに関わる指導支援の整理。

事例研究：サポートルームくさかべの事例対象児童に対して、チェックリスト等で捉えられた学

習の困難さを詳細に把握できるアセスメントツールを活用し、授業観察やアセスメントツールの活用の結果をもとに具体的な指導方法・教材教具を提案。

IV 研究の実際

1 学習障害等に係る理論研究

(1) 学習の困難さに対するアセスメント

学習面での困難さが見られる児童生徒のつまずきの背景を的確に把握し、適切な指導等の在り方を探るために、学級担任や通級指導教室担当者が学習面でのつまずきや困難さを整理して把握するためのツールとして、平成 24 年度文部科学省により実施された調査で使用された質問項目「児童等の困難な状況の参考指標」を参考にまとめたチェックリストやLD I-R (LD判断のための調査票)が活用できる。それぞれ、「聞く」「話す」「読む」「書く」「計算する」「推論する」のどの項目において困難さが見られるか把握することができる。

実際に指導を行う場合、児童生徒のより詳細な実態を把握し、一人一人にあった指導目標や指導内容を考えていく必要がある。そのための具体的なアセスメントツールについて、その目的・方法・適用年齢・検査時間・構成・評価できる能力等を調べ、検査結果を生かした指導支援への活用方法について検討することとした。本研究で取り上げたツールについての概要を示す。

ア ELC (読み書き困難のための音読・音韻処理能力簡易スクリーニング検査)

(ア) 適用年齢：小学校 2 年生～3 年生

(イ) 検査時間：10 分～15 分

(ウ) 検査内容：3 課題で構成され、短文音読課題(文脈のある文章)で音読特徴を捉え、音韻操作課題(単語と非語の逆唱・削除)で音韻意識を評価し、単語・非語音読課題でディコーディング能力(単語を音声に変換する能力)を評価する。課題はパーソナル・コンピュータ(PC)で音声と画像によって提示し、児童生徒のパフォーマンスは音声として PC 内に記録されると同時に検査者が評価用紙に誤反応も併せて記録する。結果は、正答数と反応時間及び誤読特徴により評価・分析する。

イ STRAW-R (改訂版標準読み書きスクリーニング検査-正確性と流暢性の評価-)

(ア) 適用年齢：小学校 1 年生～高校 3 年生

(イ) 検査時間：50 分程度

(ウ) 検査内容：「音読の流暢性」「音読と書取の正確性」「数字と絵の名前を速く言う課題」「計算」の 4 項目について確認できる。

①「音読の流暢性(速読)」

<小学校 1 年生～高校 3 年生>ひらがな(単語、非語)カタカナ(単語、非語)文章

②「音読と書取(聴写)の正確性」

・漢字 126 語音読<小学校 1 年生～中学 2 年生>漢字音読年齢の算出

・音読・書取(聴写)一ひらがな 1 文字・カタカナ 1 文字

・音読・書取(聴写)一ひらがな単語・カタカナ単語・漢字単語(小学校 1 年生～中学生)

③「RAN」

<5 歳児～高校生>絵や色などをできるだけ速く呼称する。

④「計算」

四則計算の学習到達度(加減乗除各 6 問)

ウ LCSA (言語・コミュニケーション発達スケール)

(ア) 適用年齢：小学校 1 年生～4 年生

(イ) 検査時間：45 分～55 分

(ウ) 検査内容：文脈の理解のほかに、対人文脈等 10 種類の項目について確認できる。結果は、「サマリーシート」に記入し、表やグラフでも確認できる。

【文や文章の聴覚的理解】「口頭指示の理解」「聞き取りによる文脈の理解」

【語彙や定型句の知識】「語彙知識」「慣用句・心的語彙」

【発話表現】「文表現」「対人文脈」

【柔軟性】

【リテラシー】「音読」「文章の読解」「音韻意識」

エ WAVES (「見る力」を育てるビジョンアセスメント)

(ア) 適用年齢：小学校 1 年生～4 年生

(イ) 検査時間：45 分～55 分

(ウ) 検査内容：視覚関連基礎スキルを評価することができる。集団、個別のいずれでも使用でき補助検査も含めて 10 種類の項目がある。目と手の協応や、視知覚速度を確認することができる。採点記録用紙に記入し、プロフィール表を作成する。

1線なぞり 2形なぞり 3数字みくらべ 4形あわせ 5形さがし 6形づくり 7形みきわめ 8形おぼえ 9形うつし 補助検査（大きさ・長さ・位置・傾き）

オ 多層指導モデルM I M(読みのアセスメント・指導パッケージ)

(ア) 適用年齢：小学校1年生～2年生

(イ) 検査時間：1回2分，全11回

(ウ) 検査内容：「絵に合うことばさがし」（正しい表記の語を素早く認識する。35問。）「三つのことばさがし」（三つの言葉が縦に続けて書いてあるものを素早く読んで，語と語の間を線で区切る。35問。）を行い，学習面でのつまずきが顕在化する前の段階で把握し指導につなげていく。

1問につき1点で採点。この得点を付属のCD-ROMに収録されている「M I M-PM採点・活用ソフト」に入力するとクラスレポートが作成できる。また，継続して実施することで，個人レポートのプロフィールも作成できる。

(2) 学習の困難さに応じた指導・支援

次に，「聞く」「話す」「読む」「書く」「計算する」「推論する」の六つの項目の領域に対応した指導・支援例について考えたものを示す。

ア 「聞く」ことの困難さへの指導・支援

(ア) 在籍学級での指導・支援

- ・指示や説明は，短く端的に行う。
- ・一斉指示で理解できない場合には，個別に伝える。
- ・活動や学習の流れや内容を視覚的に示す。
- ・ICT機器（デジタル教科書・書画カメラ等）による視覚支援理解の補助的手段の活用。
- ・できるだけ「聞く」「書く」など二つの活動を同時に行わず分ける。

(イ) 通級指導教室での指導・支援

- ・なぞなぞやクイズを行い，話を最後まで聞いてから答える練習をさせる。「言葉の聞き分け」（似ている言葉を聞き分ける。）「いくつかの音でできているかな」（音韻確認）「ぬきぬき言葉」（言葉の一つの音を抜いた言葉を考える。）「逆さ言葉」（言葉を逆さに言う。）「シャッフル言葉」（音を並び替えて言葉を完成させる。）
- ・簡単な絵本の読み聞かせをし，その後いくつかの質問をする。

イ 「話す」ことの困難さへの指導・支援

(ア) 在籍学級での指導・支援

・「いつ」「どこで」「だれが」「何を」「どうした」「どう思った」等のカードを使用し，項目に沿って話ができるようにさせる。

・「〇〇さんの意見に賛成です。」等話し方の例を提示しておき，それに沿って話ができるようにさせる。

・手本となる言い方を複数提示し，選択させて言わせる。

・事前にしたメモを見ながら話をさせる。

・決められた役割を作り，話す経験を積ませる。

（日直の司会，給食の献立発表等）

・図鑑など視覚的に分かりやすい教材を用意しておき，語彙を増やす。

(イ) 通級指導教室での指導・支援

・「いつ」「どこで」「だれが」「何を」「どうした」「どう思った」等のカードを使用し，項目に沿って話ができるようにさせる。

・担当が質問し，児童が答えるやりとりを行う。

（単語で答える。文で答える。）

・SSTカードやフローチャート，ロールプレイを活用し，状況の理解や関係の整理を行うとともに，適切な言語表現の仕方を身に付けさせる。

ウ 「読む」ことの困難さへの指導・支援

(ア) 在籍学級での指導・支援

- ・文章にスラッシュを入れたり，リーディングスリットを使用したりする。
- ・読めない漢字にはルビを振る。
- ・助詞や接続詞に色を付ける。
- ・ルビ付きテストを使用する。

(イ) 通級指導教室での指導・支援

- ・文章の提示は，文字の大きさ，フォントを工夫し，行間を広めにする。
- ・拗音や促音を△や□で示す。
- ・音のまとまりが分かるように，単語には下線を助詞には点を付けて視覚的に示す。
- ・文章に出てくる単語をマーカーで塗る。
- ・生活の中で頻度の高い身近な単語や漢字から，フラッシュカード等を用いて読む力を付けていく。
- ・文章の読みは，初めに教師の音読を聞かせる。（単語は直線的，助詞は点的な指の動きで示す。）次に教師の音読に合わせて文字を指で追わせる。
- ・読みの練習では，所見台を活用すると目と教材の位置が調整でき読みやすくなる。

- ・漢字は既知の言葉と置き換え、語呂合わせで覚える。（木が2つで林、木が3つで森等）
- ・音声教材「デイジー教科書」等の文章の読み上げ、ハイライト等の機能がある支援機器を活用する。
- ・語の意味を体系的に捉えるように学ばせる。絵カードやカルタ等の視覚情報を用いて、具体的なものから抽象的なものへと学びを深めていくようにさせる。
- ・文章を絵にして、意味理解を高めさせる。

エ 「書く」ことの困難さへの指導・支援

(ア) 在籍学級での指導・支援

- ・マス目が大きく行間が広いノートを使用する。
- ・筆圧が弱い場合は、濃い鉛筆を使う。
- ・手元に分かりやすい見本を置く。
- ・本人が達成できる量に調整する。
- ・取り組む時間を十分に確保する。
- ・プリントの工夫（穴埋め、線で結ぶ、選択肢を選ぶ、書く量が少ない）
- ・作文を書くときには、「いつ」「どこで」「だれが」「何を」「どうした」「どう思った」等のカードを使用し、項目に沿って文が書けるようにさせる。穴埋めで文の組み立てを教える。マインドマップを用いて思いや考えを整理させる。「初め」「中」「終わり」を意識させたプリントを使用する。

(イ) 通級指導教室での指導・支援

- ・目と手の協応や視覚認知を高める活動を行う。（点つなぎ、迷路、図形模写、立体パズル、オセロ、積木等）
- ・文字の練習では、手本をなぞって形を捉えてから自分で書くようにさせる。
- ・漢字を覚える時には、覚えやすい方法で練習させる。（言葉で唱えて順番に覚える。偏や旁など部分に注目して覚える。意味付けして覚える。）
- ・漢字の練習では、文字の偏や旁の位置関係を色分けしたマス目等を使用する。
- ・iPad アプリ等の活用。（漢字指なぞり、線つなぎ、間違い探し等）
- ・ICT 機器での文字入力、キーボードの使用等。

オ 「計算する」ことの困難さへの指導・支援

(ア) 在籍学級での指導・支援

- ・具体物や半具体物を使って、計算の意味や解き方が理解できるようにさせる。

- ・計算の方法を確認できるように例題を掲示しておく。
- ・計算用紙に、繰り上がり・繰り下がりのマスを設定する。
- ・文章題は、絵や図に表し、式が立てられるようにさせる。
- ・位を意識して計算できるようにマス目があるノートを使う。（位ごとに縦線を引く。位ごとに色を塗る。）
- ・児童の実態に合わせた問題数を提示する。
- ・児童が自分のレベルに合ったプリントを選択できるようにする。

(イ) 通級指導教室での指導・支援

- ・四則計算の定着の確認をする。（年間指導計画を確認し、在籍学級で行う単元の前に、四則計算の復習を行う。）
- ・すごろくやビンゴ等を使って、楽しみながら計算に慣れるようにさせる。

カ 「推論する」ことの困難さへの指導・支援

(ア) 在籍学級での指導・支援

- ・長さや重さなど実際にはかる活動を通して、体験から量を確認できるようにさせる。
- ・表やグラフの学習では、何をどのように見たらよいか、視覚的に手順を示す。
- ・デジタル教科書、書画カメラ、タブレット PC 等 ICT 機器を使った学習により、見て理解できるようにさせる。
- ・活動の見通しが持ちやすいように、目的やゴールについてポイントを絞って伝える、図やフローチャートで視覚的に理解しやすいように配慮する。
- ・体験的な活動で学んだり、過去に体験したことと結び付けたりして学習する。
- ・学習活動の順序が分かりやすくなるように活動予定表等を活用する。

(イ) 通級指導教室での指導・支援

- ・体を実際に動かす活動を通して、位置や空間を表す言葉を理解させる。
- ・定規、三角定規、分度器、コンパス等の使い方に慣れるようにさせる。（年間指導計画を確認し、在籍学級で行う単元の前に、使い方の確認をする。器具を使って線を結んだり絵を描いたりする活動を行う。）
- ・長さや重さを実際にはかる活動を通して、量を確認できるようにさせる。

- ・デジジー教科書，タブレット PC 等 ICT 機器を活用し，映像等で視覚的に量を捉えさせて測定させたり，図形などを学習させたりする。

2 研究協力校における事例研究

(1) 概要

日下部小学校（サポートルームくさかべ）で，昨年度，チェックリストで実態把握を行った児童の中で，読み・書き・言語理解の力等についてより詳細な実態把握が必要と考えられた児童5名を対象とした。（保護者の同意済み。）

児童の在籍学級での学習の困難さを把握するために，まず，授業観察を行い，授業への取り組み方，読み・書き等の様子について確認した。

次に，検討したアセスメントツールの中から，対象の児童にとって学習の困難さに対して活用できるアセスメントツールを検討・選択し，検査を実施した。

検査結果の報告後，授業観察，アセスメントツールの結果をもとに，困難さの要因等を見立て，今後の指導内容や方法を検討した。その際，山梨大学のアドバイザーの先生に助言いただいたものも参考にして，アセスメントシートにまとめ，通級指導教室担当者に伝えた。

通級指導教室担当者と児童の課題や支援方法について話をする中で，担当者が児童の実態を再確認し，指導内容について検討し，指導に生かすことができた。担当者には，アンケートで，研究を通して参考になった指導方法や，通級指導教室や在籍学級での児童の様子や変化などについて聞くようにした。

(2) アセスメントシート

授業観察や検査結果から課題を確認して仮説を立て，指導内容や対応等をまとめた図のアセスメントシートを事例ごとに作成した。通級指導教室担当者に対して，指導内容や教材教具についてこのシートを使って提案し，授業実践への支援を行った。

アセスメントシート 年 組 ()		
アセスメント		プランニング
情報	理解・解釈・仮説・課題	指導内容・対応等
授業観察 ・担任の指示を聞いて行動に移すことが難しい。 ・友達の言動に流されやすい。 ・活発に意見を発表することができていた。 ・ノートに書いた字は，漢字など画数が多いと読みにくかった。	・興味関心があることに注意が向いてしまう。 ・国語のノートの取扱いが難しいのではないか。また鉛筆も削ってあったほうが，一面ずつ差込んで漢字を書くことができると思われる。 ・課題に早く取り組むことはできたのだが，丁寧さに欠けたり，遊戯紙をじっくり見比べないで回答したりしていた。課題に取り組み際には，時間を十分に取って，間いや遊戯紙をよく見たり，じっくり考えたりすることが望まれる。 【主な課題】 ・課題に急いで取り組むため，丁寧に欠けたり間違いが現れたりしてしまう。 ・形や位置関係，方向等を見分ける力が弱い。 ・見たものを正しく認識したり丁寧に筆記したりすることが苦手。	【在籍学級での指導・支援】 ・座席は，周囲の人数が入りにくく，担任が声をかけやすい席の方が望ましい。 ・各教科のノートを整理し，マス目や罫線が狭いようであれば広いノートを使用させる。 【通級指導教室での指導・支援】 ・課題に取り組む際には，手順を一緒に確認する。 ・形や空間を捉える力を付けるため，WAVESの「はじめてトレーニングドリル1（形と位置・方向）」や点つなぎ等を活用できるとよい。 ・漢字の習得を目指して，点つなぎ，図中模写，漢字のまわりの理解等を活用できるとよい。 ・漢字を覚える際には，形や位置関係の組織を繰り返すので，言葉で補って順番に覚えていくことも有効であると思われる。 ・絵や漢字の間違い探しなどの活動を通して，見て記憶する力を伸ばす。 ・書くことを意識させるため，ワープロの使用も考えられる。作文では，丁寧にワープロを使用し，消書きだけ筆記にしてもよいと思われる。
検査結果 年 月 WAVESを行った。 ○指数【8.5以下：弱さがある可能性，7.5以下：弱さ有。早急に状態把握と支援を行う。】 (VPECI) ・視知覚，目と手総合 (ECGI) ・目と手の協応（全般） (ECAL) ・目と手の協応（正確性） (ECAI) ・視知覚（VPI） ・視知覚（VPI）		

(3) 事例

ア ケース1 主訴：「読む」ことの困難さ

「読む」ことに困難さがあり，特殊音節の読み書きができなかったり，文節をまとまりとして読むことが難しかったりする児童に，ELCを実施した。

(ア) ELCの結果

- ・短文音読・音韻操作において著しい困難さが予想され，指導や支援が必要である。
- ・単語の音読に関しては，有意味語は標準の正解数であるが，読み方の流暢性は高くなく，時間も非常にかかる状態で留意する必要がある。

(イ) 指導についての提案

- ・単語の音読フラッシュカード，カルタ，しりとり，身体運動と音の対応による音韻意識を高める。
- ・視覚的に文字のまとまりとしての単語の区切りや助詞の区別ができるように，単語をマーカーで塗ったり，音のまとまりに下線を引き，助詞には点を付ける。指で線と点の動きにする。

(ウ) ケース1のまとめ

本ケースの主訴は，「読む」ことの困難さであったが，チェックリスト及びLDI-Rによる実態把握においては，「聞く」「話す」「書く」の課題も把握された。

リーディングスリットの活用により，行の飛ばしなどが軽減し見やすさにつながった。また，単語の下には下線を引き，助詞の下には点を付けて視覚的に捉えさせるなど通級指導教室担当者の指導方法の工夫につながった。

「読む」ことの困難さが主訴であったが，視覚的な面での認知の弱さがあるかもしれないため，視覚認知や協調運動の状況をWAVESで確認し，眼球運動や協調運動等のビジョントレーニングを検討することが考えられる。

イ ケース2 主訴：「言語全般」「算数全般」の困難さ

「言語全般」「算数全般」に困難さがあり、国語、算数の学習内容を理解するのに時間がかかる、漢字を覚えたり書いたりすることに苦手さがある児童に、STRAW-Rを実施した。

(ア) STRAW-Rの結果

- ・音読の流暢性は、ひらがな、カタカナとも年齢相応に比べて困難さがある。読み間違いが多い。
- ・音読の正確性は、ひらがな、カタカナ、漢字とも困難さがある。

(イ) 指導についての提案

- ・読めない漢字にルビを振る。
- ・リーディングスリットを使用する。
- ・漢字は生活の中で使用頻度の高い身近な単語や漢字から習得させる。
- ・既知の言葉と置き換えて、語呂合わせのように覚えていく。
- ・ICT機器の活用、デジ教科書やアプリ等ICT教材を活用する。

(ウ) ケース2のまとめ

協力校の担当者からは『教科書にルビを振ったり、リーディングスリットを使ったりすると読みやすい。』と本児が話していた。「ルビを振ることで、文が格段に読みやすくなっている。」「既知の言葉と置き換えて覚える方法で練習した漢字は、漢字テストでよく書けていた。」「実態に合わせた指導方法や教材は参考になった。」等のコメントがあった。

アセスメントツールの活用により、読み、書き、計算の困難さの詳細が把握できたが、学習面全般での厳しさについても分かってきたので、語彙や一般知識の理解、読み、書き、計算をスモールステップで丁寧に積み上げていくことが必要である。

ウ ケース3 主訴：「言語全般」の困難さ

「言語全般」に困難さがあり、答えを聞きながら自分のものと比べることや状況に応じて言葉でやり取りをすることが苦手な児童に、LCSAを実施した。

(ア) LCSAの結果

- ・語彙や定型語句知識、リテラシーの領域で弱さがある。
- ・個人内差が大きく、スコアに偏りがある。
- ・聞き取った文章に含まれた事実関係の理解、複数の文のつながりの理解（特に物語文などの登

場人物の心情や状況を理解すること等）が難しい。

(イ) 指導についての提案

- ・語彙の意味を絵カードやかるた等の視覚情報を用いて、具体的なものから抽象的なものへと体系的に学びを深めていく。
- ・SSTカードやロールプレイを活用し、日常生活の中で本児が困ってしまう場面から状況の理解や関係を視覚化して整理し、適切な言語表現の仕方について学ぶ。
- ・困った場面で使える「お守りの言葉」をあらかじめ決めておく。

(ウ) ケース3のまとめ

発想を広げる柔軟性の困難さに着目して、日常生活の中のエピソードに基づいた指導内容をすすめたところ、指導の中で、実際に友達とトラブルになった場面を振り返り、何と言ったらよかったのか、どう行動したらよかったのかを一緒に考え、ロールプレイを取り入れている。「お守りの言葉」も具体的な方法を知り活用を始めている。身近な視覚情報を使い、状況理解のトレーニング等が有効と考えられる。

エ ケース4 主訴：「書く」ことの困難さ

「書く」ことに困難さがあり、黒板の文字をノートに写したり、画数が多い漢字を書いたりすることが難しい児童に、WAVESを実施した。

(ア) WAVESの結果

- ・形や位置関係、方向等を見分ける力が弱い。
- ・目と手の協応に関する正確さに課題がある。

(イ) 指導についての提案

- ・WAVESのドリルや漢字の正誤を見比べる課題に取り組む。
- ・漢字の筆順を言語化して覚える。
- ・オセロ、スリーヒントクイズ等ゲームやクイズを通して、位置関係の理解や聞く力を付ける。

(ウ) ケース4のまとめ

「書く」ことの困難さが主訴であったが、WAVESの結果から、形や位置関係、方向等を見分ける力が弱いこと、正確さに課題があることが分かった。課題に応じた教材、WAVESのドリルや漢字の基礎を育てるワークシート等を行うことで、見ることや書くことに取り組みやすくなってきたと考えられる。通級指導教室担当者からも「漢字の間違い探しの活動を通して、漢字の細部の誤りが多かったのが、意識できるようになっ

てきた。また、漢字の筆順を言語化することで、○→□と正確に書けるようになった。」とコメントがあった。

オ ケース5 主訴：「書く」ことの困難さ

「書く」ことに困難さがあり、漢字の定着が低く、テストでは書けない字や間違いが多い児童に、WAVESを実施した。

(ア) WAVESの結果

- ・形や位置関係、方向等を見分ける力が弱い。
- ・目と手の協応に関する速度に課題がある。

(イ) 指導についての提案

- ・漢字は、部首や部分に注目して覚える。
- ・WAVESのドリルや漢字の正誤を見比べる課題に取り組む。
- ・宿題で漢字のプレテストを行う。

(ウ) ケース5のまとめ

漢字の定着が難しく「書く」ことの困難さが主訴であったが、WAVESの結果から、形や位置関係、方向等を見分ける力が弱いこと、速度に課題があることが分かった。課題に応じた教材、WAVESのドリルや漢字の基礎を育てるワークシート等を行うことで、見ることや書くことに取り組みやすくなってきたと考えられる。

また、通級指導教室担当者が、学級担任と保護者と連携し、宿題で漢字のプレテストを行う等の提案をしたことにより、漢字が少しずつ定着するようになってきている。

3 考察

(1) 適切なアセスメントの実施、学習の困難さに応じた指導方法、教材教具について

今回の研究では、学習に困難さが見られる児童を支援する際、授業観察を行い「読み」「書き」等のような場面でどのような困難さが見られるか把握した。

また、チェックリストにより、「聞く」「話す」「読む」「書く」「計算する」「推論する」の困難さの大まかな把握をしてから、困難さをより詳細に実態把握するためのアセスメントツールを選択し、実施して分析した。今回は、アセスメントシートを活用し、児童の実態把握から指導方法をまとめ、通級指導教室担当者への提案に活用した。

実態把握を観察やアセスメントツールによって丁寧に行い、児童の困難の背景を見立てることはより良い指導方法を検討することにつながると考

える。

実際の指導では、児童の支援に生かすことができたり、必要に応じて指導方法や教材教具の再検討をしたり、詳細な実態把握に戻ったりすることも考えられる。

このようなPDCAサイクルにより、児童生徒の実態をよりの確に把握し、指導につないでいくことが、児童生徒の学習の困難さの改善につながると考えられる。

(2) 通級指導教室担当者の専門性及び指導力の向上を図ることについて

研究協力校のアンケートより「研究を通して、児童の課題が明らかになり、焦点を当てた指導ができるということが実感できた。」「様々なアセスメントツールがあることを知った。紹介してもらったアセスメントツールは、今後通級指導教室担当者が活用していけるようにしたい。」等のコメントがあった。

研究を通して、通級指導教室担当者がアセスメント方法の理解を深め、実践に役立てるきっかけになったと考えられる。

アセスメントシートの提案により、児童の状況をまとめ、在籍学級や通級指導教室での課題等を共有し、指導内容や教材教具を再検討できたと考えられる。

課題の背景を見立て、指導方法を検討し、実践や振り返る過程を通して、通級指導教室担当者が児童の学習の困難な状況をより詳細に客観的に分析したり、指導方針について考える視点をもつことができたりしたことは、通級指導教室担当者の自立活動の指導における専門性・指導力の向上につながっていくのではないかと考えられる。

V 成果と課題

児童生徒の学習の困難さを改善するために、状況の分析において、児童生徒の観察に加え、その困難さを客観的に確認するためにチェックリストやアセスメントツールの活用は有効であることが分かった。

学習の困難さの背景が詳しく分かると、困難さに応じた指導方法、教材教具について検討でき、よりよい指導につなげることができると考えられる。

チェックリストやアセスメントツールの活用は学習に困難がある児童生徒の指導の一助となると

考えられる。これら研究で活用したツールや困難さに応じた指導・支援方法，教材教具の例については，今後研修等で知らせるなど情報を発信し活用していけるように取り組んでいきたい。

終わりに，研究協力校の校長先生をはじめ通級指導教室担当や在籍学級担任の先生方には，貴重な実践と情報を提供していただきました。また，山梨大学の吉井勘人准教授，蘆原桂客員教授には，御指導・御助言をいただきました。心より感謝申し上げます。

【引用・参考文献】

- ・LDI-R 日本文化科学社 2005
- ・ELC 図書文化 2016
- ・STRAW-R インテルナ出版株式会社 2017
- ・LCSA 学苑社 2012
- ・WAVES 学研教育みらい 2014
- ・MIM 学研教育みらい 2010
- ・平成 24 年文部科学省調査質問項目より「児童等の困難の状況の参考指標について」
- ・中央教育審議会初等中等教育分科会 共生社会の形成に向けた インクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進（報告）
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/gijiroku/_icsFiles/afieldfile/2012/07/24/1323733_8.pdf（平成 24 年 7 月 23 日）
- ・文部科学省初等中等教育局特別支援教育課（平成 24 年 12 月 5 日）通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果について
- ・独立行政法人国立特別支援教育総合研究所（平成 28 年）「通常の学級での通級による指導の活用に関する実態調査」
- ・文部科学省(2017)発達障害を含む障害のある幼児児童生徒に対する 教育支援体制整備ガイドライン ～発達障害等の可能性の段階から，教育的ニーズに気付き，支え，つなぐために～
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/1383809.htm（平成 29 年 3 月）
- ・山梨県教育庁高校改革・特別支援教育課（令和元年 7 月 19 日）学習障害等のある児童生徒への支援体制強化事業 令和元年度 第 1 回通級指導専門性充実検討会議資料

【研究協力校】

山梨市立日下部小学校 校長 竹川 和彦

【山梨大学連携教育研究会アドバイザー】

山梨大学 准教授 吉井 勘人
山梨大学 客員教授 蘆原 桂

【総合教育センター研究アドバイザー】

研修指導課 課長 西室 直哉